

---

# エリカとジュナン

灯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エリカとジュナン

### 【NZコード】

N8927Y

### 【作者名】

灯

### 【あらすじ】

山本エリカ高校一年生。

野望を抱きいざ入学。

野望 それは優しい人と相思相愛の恋人になること…！

そのはずが…入学式に失態をおかし、その後ことごとく邪魔をされ  
て…果たしてエリカに恋人はできるのか…？

## プロローグ

そびえ立つビル。

にぎわう雑踏の中一人の少女がいた。その姿はそわそわと落ち着きなく、周りを見ているその頬は紅潮していた。

初々しくデートなのかと思えば、どうやら違ひつつあり「ひひひ」と場所を移動している。

そんな少女の肩にぽんと手が置かれた。

「きたっ！！

「ねえ彼女暇なの？」

「は、はい …」

暇ですと続けるために、笑顔で勢い良く振り向いたが、言葉が最後まで紡がれる前に、体ごと笑顔も凍り付いた。

振り向いた先にいたのは整った顔。長いまつげにくつきり一重。唇は瑞々しく、男であれば貪りつきくなるものだ。

「どうした？」「伺うように傾けた頭からサラサラの髪が流れ、その人物はにっこりと微笑んだ。

これも男なら目がハートになつていていたであろう程美しく、可愛い。いや、女であろうと同じだらう。

が、少女にとつては違うらしい。

「なつなつなんでっ！あんたがここにいるのよおーー！」

蒼白になつた少女の声が街に響いた。

\*\*\*\*\*

「あ？なんであつて買い物だけど。まあ山田がここに来れば面白いもんが見れるとは言つてたけど…」トモちゃんっ！…何て事を言つてくれたんだ！と恨んでみたが、状況は改善されるわけもない。とりあえずここは逃げるしかないと「あら、そうなの？じゃあまたね」と爽やかに立ち去ろうとすると肩を掴まれてしまつた。

「まあまあ暇なんだろ？つき合えよ」

ビクリと肩を揺らした瞬間後ろから若い男が声を掛けってきた。

「ねえ、彼女たち暇なの？暇なら一緒に遊ばない？」

頬を赤くした男たちは少女 エリカの隣にいる人物をチラチラと見ながら話していく。

「だつてさ、どうする？」

にやりと意地の悪い笑顔を浮かべながら聞いてくるそれを見てエリカは耐えきれず、やや涙を浮かべて叫んだ。

「いつ行くわけないでしょお！…」

だつてさ、と声を掛けてきた男たちに言つと残念そうにその場を去つていいく。

「おい、いいのか？ナンパ待ちだつたんだり？」

にやにやと、これまた意地の悪い笑みで言つものだからエリカはついにキレてしまった。

「う、うるさい！…なつ何で男のあんたがモテんのよお！…」

そや。この意地の悪い笑顔をしている人物は正真正銘の男だ。

「しようがないだろ。綺麗なんだから」

にっこりと言われて言い返したいが、眞実のため言い返せず歯噛みをするしかない。

「…しようがないから可哀想なエリカに付き合つてやるよ。またケーキ食うんだろ？」

ため息をもらしながらいうその姿にさらにイライラするが、この悔しさは甘い物を食べて紛らわさなくてはやつていられず「当たり前でしょう」と叫んだ。

悔やんでも仕方がないが、何でこんなことに…と過去に思いを馳せるエリカだった。

\*\*\*\*\*

## すべての始まり

それは入学式、真新しい制服に包まれたエリカは胸に小さな野望を抱いていた。

高校生になつたら彼氏を作る！！

それも優しい人と想い想われるような関係を。

中学生の時は友達と一緒に遊ぶ方が楽しかったし、興味が無かつたけど、卒業式に気がつけば周りはカップルばかりで憧れてしまつたのだ。

友達の幸せそうに笑う顔を見たエリカは、高校でそういう存在を作ると心に誓つた。

しかしますは友達作りもしつかりとしなくては楽しい学校生活は送れないだろう。

どちらにせよ初めが肝心だ。クラス発表を見たエリカは早速自分のクラスへ向かうと席を探しているのか周りを見渡す人を見ついた。ああ仲間だ。と嬉しく思いながら近づき声をかける。

「あなたもこここのクラスなの？私もそつなんだ。山本エリカつて言うんだけど、よろしくね」

緊張しながらもつこりと笑つたが、相手の顔を見た瞬間固まつてしまつた。

な、なんて美少女！！可愛いつていうか、きれい！！

はつきり言つてしまえば一目惚れだ。絶対に友達になりたい！と心の底から叫ぶ。

「え？ああ…」

少し驚いて動搖しているようだけれど何の問題はない。

「名前はなんていうの？」

「八広秋…」

わああ、声は甘すぎず、ハスキーナ感じが益々いい！

秋ちゃん…かつこかわいい名前だ…。

「あ、私七中なんだけど秋ちゃんは何中?」

「……はあー?」

「エリカ! あんたもこのクラスだつたんだ」

デキドキと秋ちゃんの返答を待つて、私は中学校の時からの友達朋子ちゃんとトモちゃんは話しかけてきた。

トモちゃんはわりとドライで、一緒に入学式行こう! と言つたら「あんたは初っ端からトーンショーン高そうでウザいから一人で行つて」と断られてしまった。

ちよつと泣きそうになつたのは秘密だ。

そのトモちゃんとも同じクラスだなんてなんてツイでいるのだろう。

「トモちゃん! トモちゃん! 見てみて! ハ広秋ちゃん! すつごい綺麗だよね!」

ふふふ、一緒に来ていればトモちゃんもこの美貌の少女に早く会えていたはずなのに、私の誘いを断るから遅れをとつてしまつたのだよ。と鼻を高くしながら話していると何故かトモちゃんは呆れている。

というか横から冷氣を感じる。

「エリカ! あんたよく見なよ? 制服ズボンじやん」  
はあとため息を一つ。

……。

素速く隣を見ると明らかなる男子制服にエリカは凍り付いた。

「ふうん……“秋ちゃん”ね……これからよろしくな“エリカ”」  
ギギギッと壊れた機械のように冷や汗をかきながら顔を上げると、  
にっこりと微笑まれた。が、何故か背筋がゾクゾクして顔面が蒼白になつてしまつ。

しかもハ広に山本と同じ“や”同士なわけで、席ももちろん近い  
ため私は逃げ場などあるはずもなく……気がつけば“秋ちゃん”こと秋に、ちよつかいを出される日々が続いたのである。

そしてそんなこんなで彼氏を作る暇もなく……声を掛けられたかと

思えば一緒にいる秋にラブコールという構図が出来上がっていた。

。

これは叫ばずにいられようか、いや、いられない！！

何で女の私を差し置いてモテてるの…？（いや、綺麗なのは認め  
るがつ…！）

というか女のプライドはズタズタだ。

そうして休みに出会いを求めて出掛ければ必ず秋に遭い、（トモ  
ちゃんっ！あなた本当に友達ですか！？）秋がナンパされ、心にす  
きま風というスタイルになっていた。

……私の憧れの高校生活、カムバツクツ…！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8927y/>

---

エリカとジュナン

2011年11月27日22時50分発行